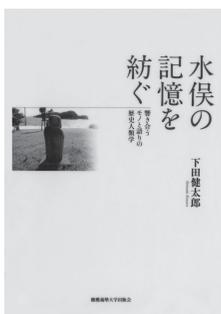


## 書評



下田健太郎著

## 『水俣の記憶を紡ぐ』

— 響き合うモノと語りの歴史人類学』

慶應義塾大学出版会、2016年

評者 萩原 修子

熊本学園大学商学部

「水俣病」について、私たちはどのくらい知っているだろうか。すでに公式発見から半世紀以上を経た過去の公害、そこから教訓を学ぶものという位置づけかもしれない。しかし、あるきっかけが全く別の視点を開くこともある。本書は、漁師で被害者O氏のインタビュー記事と出会った著者が、「自分が知識としてもっていた『水俣病』とはまったく異なる地点から、その記憶が紡ぎ出されているということに衝撃を受けただけでなく、そこに私たちが生きる『今』を創造的に捉え直すうえで重要な手がかりがあると直観した」ことから始まる。そこから、著者はO氏を訪ね、その後、2006年から2015年に水俣・芦北地域で総計約26カ月のフィールドワークを行った。本書は、その足かけ10年にわたるフィールドワークと、膨大な資料の読み込みにもとづいた著者の博士論文がもとになっている学術書である。

学術書として、歴史人類学的に資する成果もさることながら、まず、本書の大きな魅力は、底流にある「私たちが育んできた風土や生きものたち、そして人間の生をいかに捉えるか」という著者の根源的な問いと、それをめぐる登場人物たちの語りの滋味深さ、真摯さである。

評者の印象に強く残っているエピソードは、支援者として水俣に移住したJ氏がO氏に言われた「水俣病を自分のことと思えないならさっさと帰っていいよ」と言われたときのことだ。誰かの水俣病を支えるのではなく「私の水俣病」とは何かという課題と向き合うこと、それが「人はどう生きるか」へ結びつく課題となる。水俣病はもちろん、私たちが、多くの社会問題における当事者であることは多くない。しかし、その問題が、自分の生の課題に連なるという視点が得られれば、当事者を超えて、多くの人々にとって開かれた「私の問題」になりうる。

さて、本書で主に取り上げられているのは、水俣病問題の渦中にあり続ける被害者有志グループ「本願の会」である。1995年に発足した「本願の会」のメンバーは、従来の加害／被害の図式を超えたところで、水俣湾埋立地の一角にみずからの手で彫った石像を祀り、「いのち」や「よみがえり」を主題とする祈りの行事を展開してきた。著者は、「本願の会」のメンバーの実践に、患者認定や補償、政治的な解決というコンテキストで語られる完結を前

提とした「水俣病」とは対照的な歴史実践を見いだす。歴史実践、すなわち日常における水俣病経験の語り直しは、石像制作の実践とも連動しながら行われてきていることに著者は着目する。一例を挙げれば、支援者J氏が製作した石像の表情は、当初、父のように慕う被害者Y氏の病床の苦悶の表情と重なっていた。しかし、Y氏の死後、時の経過を経て、石像の風化とともに、それは可愛がられる表情となる。さらに、石像の位置する埋立地の景観に子どもや生きものの存在が意識されるようになると、Y氏の「来世」や「水俣病からの解放」と重ねてJ氏の語りが促される。このように、死者との関係を含めた水俣病経験の想起が、石像によって表出されたり、石像が想起を促したり、石像の風化とともに想起が新たになったり、という事例が丁寧に描出されている。こうして経験の想起は、たんにモノや語りによって表象される過去の完結した経験ではなく、「モノや語りを媒介としながら生きられる水俣病経験」といえるのである。

たとえば、漁師で認定患者であるT氏は、「のさり」の意味について、ただ授かりものというのではなく、「運命」、「自然」であるという。そして、自分と自然は共同体で、自然の中に溶け込み、自分と自然の境界線がなくなったのが真実と言う。著者は、その解釈を、恵比寿からの贈り物である魚および身体に忍び込んだ毒と時間をかけて向き合っていくなかで、その毒を引き受けた身体を否定するのではなく、新たな自然として生き直す技法として理解する。

「のさり」の意味はこうして、時間の経過のうちに、身体・自然を通して、「今」を生きながら語り直される。経験は決して完結するものではない。この生きられる水俣病経験こそが、本書が示す新しい「経験」のカタチであり、改めて考えれば、我々の日常の実践そのものでもある。死者やその遺品と折々に対話したり、過去を想起する際、死者の表情も存在の意味も、過去の経験も、我々の日常の生と響き合いながら続いていく。

本書の読後感は、なんとも不思議な感覚だった。この書物には、たしかに時間が流れている。多くの人やモノ、景観が変化し、移ろいながら、互いに響き合いながら、記憶が紡がれている。一方で、著者の10年は、そこでの人やモノと響き合いながらどのように紡がれてきたのだろう。「あとがき」にその断片が記されているが、本書を支えるもう一つの水俣の経験は、著者自身のフィールドで紡ぎだされた経験ではないか。それが別の書物となれば、本書とは異なる位相の水俣の記憶が、本書と響き合って、誰かの「生きられる経験」につながるように思えたが、いかがであろう。

(初出『図書新聞』2018年1月27日 3336号より転載)